

39号の刊行にあたって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 足立, 拓朗, Adachi, Takuro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00050684

39号の刊行にあたって

足立 拓朗

(金沢大学歴史言語文化学系(人文学類考古学専門分野・特別プログラム:考古学))

今年度の金沢大学考古学紀要は、中村慎一先生、中村誠一先生の還暦記念号として編集した。2017年11月25日(土)に第43回金沢大学考古学大会(中村慎一先生・中村誠一先生還暦記念大会)を実施し、本書はその発表成果が中心となっている。この記念大会は石川四校記念文化交流館で開催し、両先生の関係者の方々、卒業生、在学学生、教員など、35名が参加し、以下の研究発表が行われた(写真1)。

最初に、久保田慎二氏(金沢大学国際文化資源学術研究センター)・小林正史氏(北陸学院大学人間総合学部)・宮田佳樹氏(金沢大学先端科学・イノベーション推進機構)の3名による、「煮るか炊くか―田螺山遺跡のコメ調理―」が発表された。この研究は、中村慎一先生の科学研究費グループの研究成果の一部である。続いて、松永篤知氏(金沢大学資料館)による、「良渚文化期の編物について」が発表された。松永氏は中村慎一先生の指導を受けた、本学の卒業生である。3番目の発表者である原田幹氏(愛知県教育委員会文化財保護室)は、大学院で中村慎一先生から教を受けた研究者で、発表内容は「実験石犁の使用痕」であった。

その後、休憩を挟んで、中村誠一先生に関係の深い二人の研究者の発表が行われた。まず、鈴木真太郎氏(グアテマラ・デルバジェ大学考古学人類学研究センター)による「古代マヤ文明黎明期におけるトウモロコシ食文化とニシュタマリゼーションの発生起源についての考察」、そして、市川 彰氏(名古屋大学高等研究院)による「メソアメリカ考古学における日本人研究者の軌跡」が発表された。

記念大会後に会場を移して、盛大な記念懇親会が行われ、両先生へ花束と記念品が贈られた(写真2)。

昨年度から新たに「特別プログラム:考古学」がスタートし、今年度12月にプログラム生が確定した。第1期のプログラム生は、フィールド文化学コースから5名、歴史文化学コース(東洋史主履修分野)から1名の合計6名となった。金沢大学の考古学研究室として、彼らは第44期となる。このような改組は今後も引き続くことが予想される。この変革期において、教育・研究の一層の向上を図っていくことが求められている。

本書、『金沢大学考古学紀要』は、金沢大学附属図書館学術情報リポジトリ KURA で、冊子体版と同じ内容のPDF(カラー版)を一般公開している。また、考古学研究室ではWeb版の小雑誌『金大考古』も刊行している。こちらは研究室主催の考古学大会で発表された論考などを中心に編集しているが、ある程度は頁数に制限なく掲載できることが特徴である。これも KURA で無料一般公開している。ご覧いただければ幸いである。



写真1 考古学大会の様子



写真2 両先生への花束贈呈